

☆「広報とさしみず 8月号」に東近伸・副編集委員長の記事を掲載しました！

市域の歴史景観(15)「遣明船の土佐清水寄港と唐物の硯」 東近 伸

7月3日の「市史編さん・編集合同委員会」で協議したとおり、今年度は、各市史編集委員の紹介も兼ねながら、市史のトピック部分を記事する取り組みを実施しております。今月号は副編集委員長・東近伸氏の記事を掲載させていただきました。9月号では、松田直則編集委員の「市域の歴史景観(16)加久見氏や大岐氏の中世山城」と題して記事を執筆いただき掲載する予定です。

このように、編集委員各位の専門とする分野のトピックを随時記事していきます。お楽しみに。



◎市史執筆のブレイクタイム(7)

(1) 高知県漁民の台湾・南方澳移住なんぽうおう (大正末期～昭和初期)

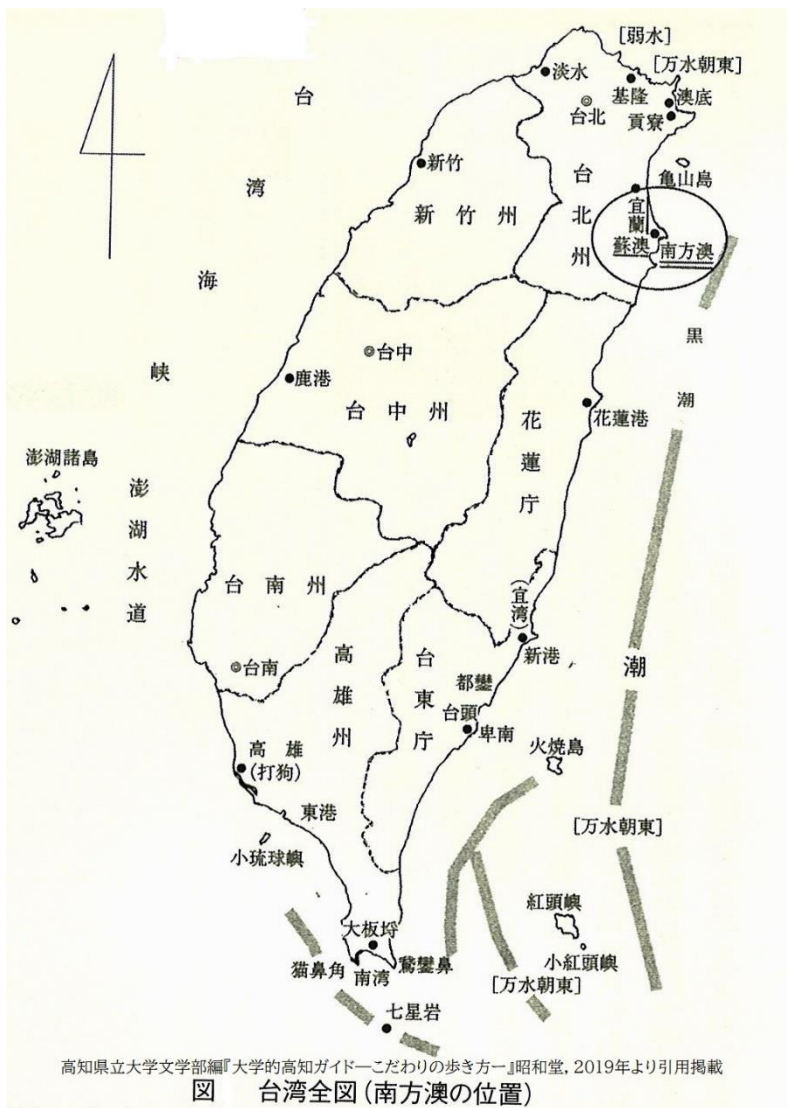
松尾は、近世の景観がそのままタイムスリップしたような場所が多く残存する。吉福家住宅や天満宮・明神宮等々、近世から近代初めにかけての歴史的建造物や石造物がたくさん見られる。

その中で松尾天満宮には、社内の回り舞台が昭和47年(1972)に市指定民俗有形文化財として登録されている。宮内南側の鳥居には、「昭和六年(1931)建立」「ボルネオ渡航者献鳥居碑」との銘があり、当時、英国領北ボルネオ島にボルネオ水産公司の水産加工場(鯉節納屋)が建てられ、そこに従事する漁師や納屋番として松尾からも数十名が出稼ぎに行った。この鳥居は、その人々によって建立された。しかし、これに先立つ数年前に、漁業移民として台湾に移住した松尾出身の人々が、既にいたことは『前市史』にも記述はなく、その事実を知る人はほとんどいない。

\*\*\* \*\*

元高知大学人文学部教授・吉尾寛氏は、これまで黒潮認知の歴史を研究する過程で日本統治時代の台湾・南方澳に日本からの漁民移民が組織的に行われたことを突きとめた①。その内容を数年前に土佐清水市郷土史同好会定例会で中央公民館にて講話した。当時日本の統治下にあった台湾の漁業不振が、その背景にある。大正12年(1923)、台湾総督府は2年の歳月と660,000円(当時の金額)を投入し、南方澳に漁港を築造した。地元漁民は冬季と春季に鯉漁で生計を立てたが、餌不足もあり漁業不振の状態であった。

そこで、大正15年(1926)から昭和2年(1927)にかけて、台北州知事は、国庫補助を受けて漁業振興促進のため、主に黒潮影響下の漁業先進地である高知・愛媛・宮崎の各県からの漁業移民を募集した②。漁業に従事してその技術に卓越した漁民を受け入れ、彼らの力を借り、漁業を大きく振興させて



いこうとするねらいがあった。

また、日本人の台湾移住の例は以前にもあった。大正初期に台湾で漁業を行い、鯉節加工場を経営した戸田圓次の成功例である。彼は中土佐町出身で現土佐清水市大浜を拠点にカツオ竿釣り漁で財力を蓄え、それをもとでとして台湾に漁業進出し、基隆市に戸田鯉節製造工場を建設した③。

このような成功例を間近に見て大正 15 年 (1926) に高知県から 20 戸、昭和 2 年 (1927) に高知県から 26 戸、愛媛県から 17 戸、長崎県から 4 戸、大分県・鹿児島県から各 1 戸などの漁業移民が行われた④。高知県民は他県の移民よりその数が多かった。

土佐清水市域からの移住者は、吉尾氏の調査によると当時の清水町清水・中ノ濱・松尾などの漁民の移住が多数を占めた。彼らは、南方澳神州路一帯 (現在の華山路四巷の路地) に住んでいた。そこには高知県の他地域から来た人々や愛媛、長崎、大分、鹿児島

などから移住してきた人々などの集住地であった。ピーク時は 400 戸余りの移民が住み、「移民仔底 (移民部落)」と呼ばれていた⑤

\*\*\* \*\*

吉尾氏は日本への引揚者の聞き取りを丹念に行い、昭和 15 年 (1940) に大型台風の襲来したこと、「移民仔底」の長屋では、日本各地の人々が混ざり合い居住していたので方言が強くお互いの言葉が理解できなかったこと、学校が終わってすぐに水着に着替えて海水浴場へいったこと、深い山からタロイモなどを背負い行商に地元の人々が来ていたこと等々、当時の生活の様子を聞き取っている⑥。

註

①吉尾 寛「戦前、高知県漁民の台湾・南方澳への移住 (序説)」(『土佐史談第 254 号』土佐史談会、2013 年、22—38 頁)

②臺北州内部勸業課『蘇澳の漁港』臺北州、70—73 頁。

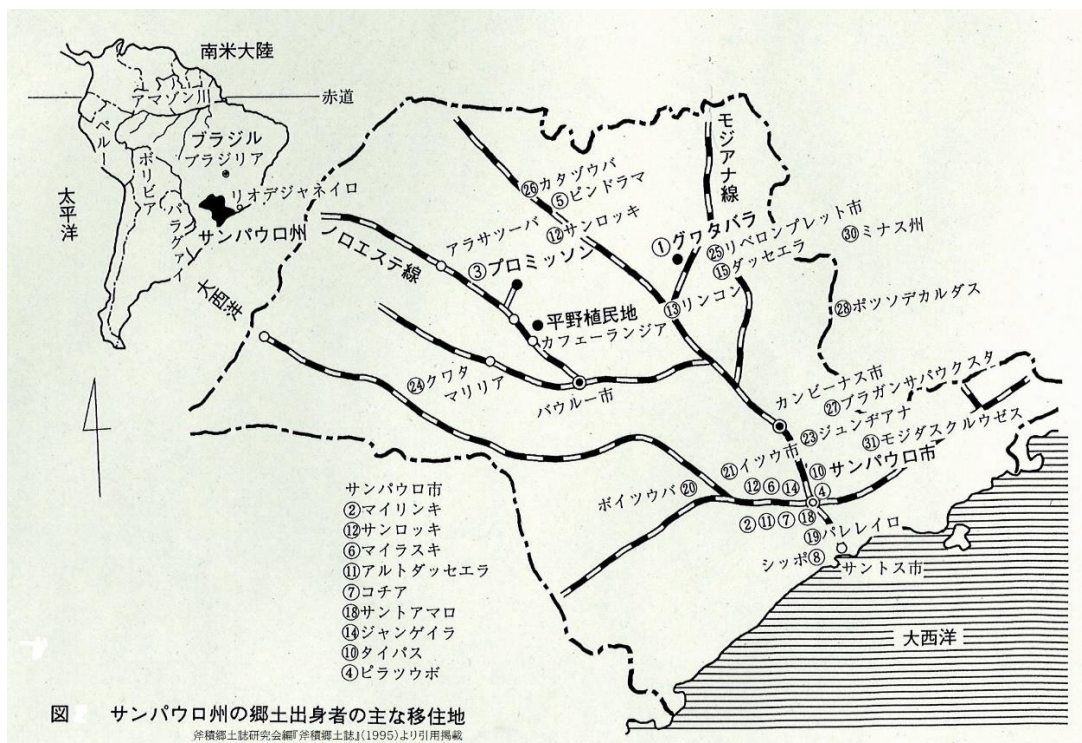
③①に同じ。

岡林正十郎「第三章 戦前・戦後の頃」(『土佐のカツオ漁業史』高知県中土佐町、2001 年、360 頁)

④①に同じ。

⑤吉尾 寛「戦前の移住地に映る高知県民の暮らし—黒潮がつなぐ台湾・南方澳—」(高知県立大学編『大学の高知ガイド』昭和堂、2019 年、309—323 頁)

⑥⑤に同じ。



## (2) 土佐清水市斧積からブラジルへの移住 (明治末・大正・昭和)

日本からブラジルへの移住の歴史は、明治41年(1908)4月28日、農業契約移民158家族782人が笠戸丸にて神戸港からブラジル・サントス港へ入港したことに始まる。

その2年後(明治43年・1910)に第2回の移民があり、全国から集まった247家族906人が旅順丸にてブラジルに向かった。その中に三崎村斧積(現在の土佐清水市斧積)の人々3家族7人が含まれていた。彼らはサントス港から北へ約350キロに位置するグワタパラ耕地にて2年間コーヒー園の契約労働者として働き、その後、サンパウロ近郊で馬鈴薯・トマト・胡瓜・白菜・キャベツなどを栽培し、近郊農業を行った。

移住者たちは、希望を胸に現実と苦闘しながらも、子どもを育てた。二世世代は多くの子どもたちが大学教育を受け、その多くは第2次・第3次産業に従事し、優れた人材を輩出している。ブラジルへ斧積から移住していった先人たちの移住した年・家族数・人数を以下に記す。

- (1)明治43年(1908) 笠戸丸・・・3家族7人
- (2)大正4年(1914) 帝国丸・・・6家族16人
- (3)大正9年(1920) 河内丸・・・15家族59人
- (3)大正15年(1926) モンテビデオ丸・・・1家族2人
- (4)昭和4年(1929) マニラ丸・・・1家族3人
- (5)昭和5年(1930) サントス丸・・・2家族5人
- (6)昭和8年(1933) マニラ丸・・・2家族4人
- (7)昭和9年(1934) アリゾナ丸・・・2家族4人
- (8)昭和30年(1955) アメリカ丸・・・1家族5人
- (9)昭和34年(1959) ブラジル丸・・・1家族2人

この移住者たちの中には、異なる気候の中でマラリアに罹患し、逝去された方々もいる。しかし、斧積からの移住者たちは、移住地を自分たちの楽園とすべく心に希望を灯し、現実と向き合いながら苦闘し、遠い異国の地で自分たちの生きる道を切り拓いていったのである。

【引用・参考文献】斧積郷土誌研究会『斧積郷土誌』土佐清水市斧積，1995年，263p.